

改訂

大 ちてあそ ちてあそ
弄ぶ 玩ぶ

845-2/3

海 379 598

標日宮 326 1,253

浜(辺)

或いは 74

周旋 魏 49 元 1048

帰還 516

91トル

第十一章

帯方郡の太守劉夏

出立

難斗米、都市牛利、
船は、色鮮やかな大小の旗を風になびかせて

邪馬台国の浜辺を離れた。

「どうか、無事に御帰還ください」
「各陽の都の土産話をお待ちしております」

大勢の者達は、われんばかりの歓声をあげ
て別れを惜んだ。

或は絶え、或は連なる倭国西辺(肥前)

伊都国を経て、
檣日宮に詣でた後、一行はい

よいよ海(玄海)へと漕ぎ出した。

九州北岸(対馬)から、一支国(壹岐)

対馬国へと島づたいに北上し、そしてさら

に北を目指す。

次々に押し寄せる波。まるで木の葉のよう

にもてあそばれる船で、しかし共に船に乗せた持衰

の必死の祈りの甲斐あってか、やがて山程も

三田 2-369P
ルビ

大 2265P
紀上 351
1258
95

三日月茶2-306^P エイ(おし)
魏文傳 45^P 素 大カン
1500^P 5-31 1998^P

↑
飲支糖
45P

う 承け継ぐ ⑤1266 169

2006
239
1767年

天つき
改行

たどり着いた
⑤1257 399

1,255 P1/4

改行

改行

改行

改行

元1085 貞観 清和・嵯峨に於ける元1085
859年~877年
⑤1500
⑤1511
持老 ⑤1511
2021

魏志倭人伝 45
アケル

ながら受け継が

きた 次頁 39

「其の持衰が謹んでいなかっただからだ」といってえを殺したりたという。(魏志倭人伝) 尚、参考迄に述べると、
△持衰を船に乗せる✓
という「魏志倭人伝」の記載と全く同様にうな風習が、ごく近世に至るまで東北北陸に残なていたようである。(平安時代前期の貞観年中に僧円覚が開創した曹遇したる「盛岡」に於ける祈禱師は海中へ飛び込み、他の乗船者達も留を切った。命拾った人々は円覚寺に絵馬を納めた」というのである。昭和五十九年五月三十一日、毎日テレビ朝のホントライン✓。日本社寺大観名著刊行会へ円覚寺。四真図版 213 214 他
三世紀初頭の倭国の「持衰の風習」が、はるか千数百年の年月を経て、近年に至る迄で、何とも思ひもよらない東北地方の寒村で、細々と伝えられていたのであらうか。

魏志倭人伝 45

1492

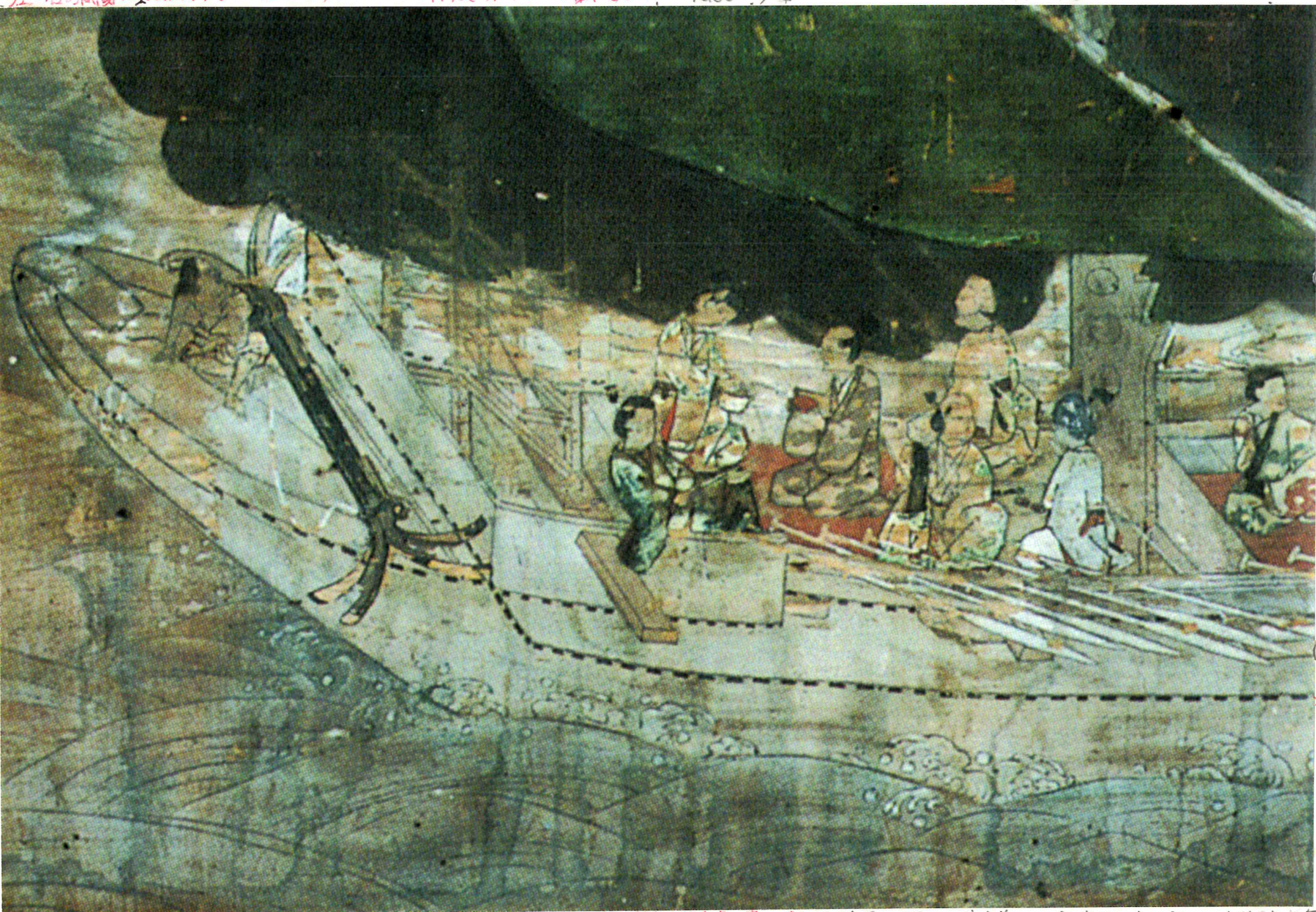
39

2335 無し
小林 1014

左右の両面に掲載する。左右カットない。(限画一杯大きく載せる)

1255L 2/4

1494L 2/2 13P



左下は、
（^い）
錨と人となつたぐし
状の縄
（^い）
*「ひ」
の变形は
あきせん
が。

船と人との縄が描かれている ↑ 写 1494 寛永10年(1633)の北国船絵馬 石井謙治、安産裕之、船の科学館、7頁参照。

$$1255^{\frac{7}{4}} - 3/4$$

X 7

北国廻船

北前船

とあいう

所蔵 青森県西津軽郡深浦町 円覚寺

奉納者 庄司太郎左衛門

奉納年月 寛永拾年癸酉（一六三三）

津輕三十三観音の十番目、深浦町円覚寺は古い歴史を持つこの地方の名刹である。この寺の瑠璃殿には室町時代に作られた厨子堂があり、国の重文に指定されている。この殿にある寛永十年の当船絵馬は、我が国最古の北国船絵馬であるという。越前敦賀住庄司太郎左衛門の名がみえる。

(改行)

船首の碇に体を縄で結びつけているざんばら髪（ざんばら）の男は持衰ではないだろうか。帆にある紋印は「割り下り藤」の類らしい。風のない時は両舷に十一本ずつ備えられた櫂（かい）を用いて航海したと思われる。船首の客は酒を酌み交わして楽しんでいる。「後ろにいる鉢巻奏の人

(改行)

74

物は従者が水主のよみだ。縦約一六〇×横約一四〇センチ程の大きな絵馬で、もとは極彩色の美しいものであつたらしく、時代を経た今日でも、なおその名残りをとどめている。

大

HL

きた 来元不物

『日本の船絵馬』北前船、牧野隆信、刀禰勇太郎、
西澤顯山、柏書房、236～271頁参照。

⑦ 1494⁹ - $\frac{3}{2}$ 13 行

502

- ・カラー
- ・右頁の下半分に大きく掲載下さい。

1,255⁷-4/4



14Q9 中心りかけ

写真図版 214

^{まげがく}鬻額 (青森県深浦町、円覚寺蔵)

人々は航海安全の祈りを絵馬に表した。なかでも^{とく}特異^ななのが、^{トレ}青森^{ハル}県津軽に残る^{ちよんまげ}ちよんまげの絵馬「^{まげがく}鬻額」。遭難の危機に鬻を切^きって神仏^{しんぶつ}の加護を祈り、生還できると鬻を奉納した。

13Q9

『^{たけみつ まこと}地図でめぐる神社とお寺』武光誠、帝国書院、平成24年7月12日発行、13頁参照。

天つき
88行

・後50年 唐土等の文化が衰退する
58 信仰 1147

1,256^P

天つき
88行

トル

と、感慨深く思われる。

■もつとも、この日持衰の風習は、

①殷の系統を引く者達、伝統的に伝えられてきた

のか、扶余系殷民達あるいは箕子達の社会で、古来

②それとも、太伯の後と自称する倭人達によ

って、江南からもたらされたものなのか、

などといった詳細については、言うまでもな

い。分

■もしかしたら、

日持衰の風習は扶余系殷民達の固有の信

仰に基づくものであり、日倭国大乱において

―――弥生中期末(後50年)ころ、中国近畿地方から東北地

方へ落ちのびた、扶余系殷民達が、この日持衰の風習を近世

に至るまで伝えてきたのではなからうか、

とも考えられるが、想像の域を出るものでは

ない。

■いかともあれ、後世の日本の文献などに

日持衰を思わせる記載が見当たらないところ

を見ると、倭人達へ支配者

となつた者達)の習俗ではなかったのであらう

う、と推察される。

米

魏志倭傳 37 其の北岸 着いた ⑤1262 39

3/3 205 108

サリウオン 沙里院 世界大百科(地図) 28P ④1203 ⑤1204 改訂

①<人>957 大韓の988 ②<人>521 ③<人>109 ④<人>216 ⑤<人>237 1,257

557.12.12 ①② 韓口古代史 216 237 ③190 ④改訂

船はついに、倭国の北岸にたどり着いた。・とはいえず、船旅は、これからも

さらに続く。数日の後、難升米・牛利等は再び船上の人となった。・船は、朝鮮半島の海岸沿いに西

へ向かい、帯方郡に至った。帯方郡は、二の五年ころ公孫度が樂浪郡の南半部有果以南をさいて分置した郡で、の

後の三・三年まで存続する。・(既述) 第十五章 極東地域の混乱の項において既述

帯方郡の郡治址は、今の黄海道鳳山郡沙里院駅の東南約十里(平壤の南約六〇キロ)・俗称「唐土城」がそれであろうと推定されている。

・この付近には古墳群があり、その古墳の中から「使君帯方太守張撫夷塼」

の銘のある墓が発見された。・これによつて、唐土城が帯方郡渠の治所であったことは疑う余地がないという。・「東洋史辞典」創

元新社、へ帯方郡。・「韓国古代史」(上)李丙

憲、六興出版、二一五頁、二三七頁参照) ①② ③④ ⑤⑥

1,259⁷

④1201⁷
・後漢の初めに達年
・57、107年

新刊 1299⁷

帯方郡と朝鮮半島南端とは、つい目と鼻の
先である。
・辰韓から帯方郡へやって来た老人たちが、
白御子の鬼神のような働きをいまだに鮮烈に
覚えており、恐怖をもつて、その当時二〇〇
年)の有様を語ったのだった。
そこで劉夏は、その日御子の使いの者達が
やってきた、と聞いた時、
へさてこそは、蛮勇の猛者共が舞い昇って
きた、と心であらう、
と思いい、心中おだやかならぬものを感
た。
とところが何と、いざ目通りを許し、二人の
待つ儀式の場へ、足を運んだとき、劉夏は、
思わす、うーむ、とうなつた。
■身にもまとい、た衣服は、いさか前時代的な
周の前漢頃の江南の風俗を残して、少
ばかり奇異な印象もあつたが、
の前に居るのは、中国の風習にかなう品格の
高い礼儀をもつて劉夏を迎えた、目もと涼し
い使者達であつた。

（）
指呼の距離にある

こと
元 2290
愛でたえ
朕事すること利

リ人 小林 632
南 献上 王にあげる 贈

め 愛す 2172
ほめる
1260
改行

改行

はるばる 遠路をもいとわす帯方
郡を訪ねてまいら小たことは、私の嘉すところ
ころです。洛陽の都におわす天子も、倭国の
女王からの朝貢を、ことのほかお喜びになる
であらう。
こう言っ劉夏は、倭国の使者達を大い
に歓待した。
一方難升米は、日御子の言葉を述べ、また魏
国の天子への朝献によろしくお力添え下さる
ようにと、帯方郡の太守をたてて懇願した。
ここに、帯方の太守への心づけの品々の献呈
に及んだ。●男生口四人。女生口六人が優雅に
物腰で渾んでくる進物は、儀式の場に次々と
並べ置かれていった。
劉夏は、日御子の心ばえを愛で、
う言った。
「私は、あなたの国の女王の為にとげた手
腕に感入っています。そしてまた、この度
の朝貢にても、打てば響くような俊敏な対応
大変嬉しく思っておりますぞ。そこで、洛陽

258

小林 632

こと

1666

1,261

謝意を表す

1166 大聖 利く(気がく)

204

2063

貴殿

成果を収める

へ詣ってのあなた方の朝貢が無事成功する

ように、私としても尽力致しますよう。気の

きいた吏と遣わし、あなた方のお伴をさせて

京都洛陽へ至らせたいと思います。この者に

何なりと申し付けらるるかよい

太守の申し出に對して、二人が厚く謝意を

表わしたことは、いうまでもないことであ

た。

米

難升米らは、弾む思いで、洛陽への海路を

たどっていった。

右手には、遼東半島の山なみが連なり、

左手前方には、山東半島の突端部が波

間に見え隠れしていた。稚やかな

黄色い旗を靡かせた魏国の船は、黄

渤海へ入り、更に渤海の奥深くへ

と漕ぎ進んでいった。

*

→ H3.9.21 (土) 古
H10.4.5 (日)

くひを
来日 654

1,262 P - 1/2
わたりと ①1269 69

かわさぬ
川船 480

さか 云
逆らう 871
妙目 147

はか 云
うまむ 1788
罪かす 1666

黄河の流氷
朝貢の使者達を乗せた魏国の船は、
やかて、渤海に注ぐ黄河の河口に着いた。
乗しかえた川船は、大河の流水に逆らい、潮つてい
った。とであうか。
*この当時の黄河は、今の鄭州あたりから東
北流し、現在の黄河河口あたりで渤海に注い
でいたようだという。(「世界大百科事典」平
凡社〈黄河〉参照) ①240 ②黄河の変遷
行けども行けども大平原が広がっていった。
船は、ゆつくり進み、――一見のんび
りした船の旅が、来る日も来る日も続いた。
し、かーともあれ、この流水の川上に、目
す洛陽の都があるのだ。
人夢にまで見た洛陽の都。早くこの目でし
かと確かめた。いものよ。✓
難升米の胸は大きくふくらみ、旅の疲れも
とれ、ほい、だ。あつた。
川を渡る風は心地よく、岸辺を行き交う

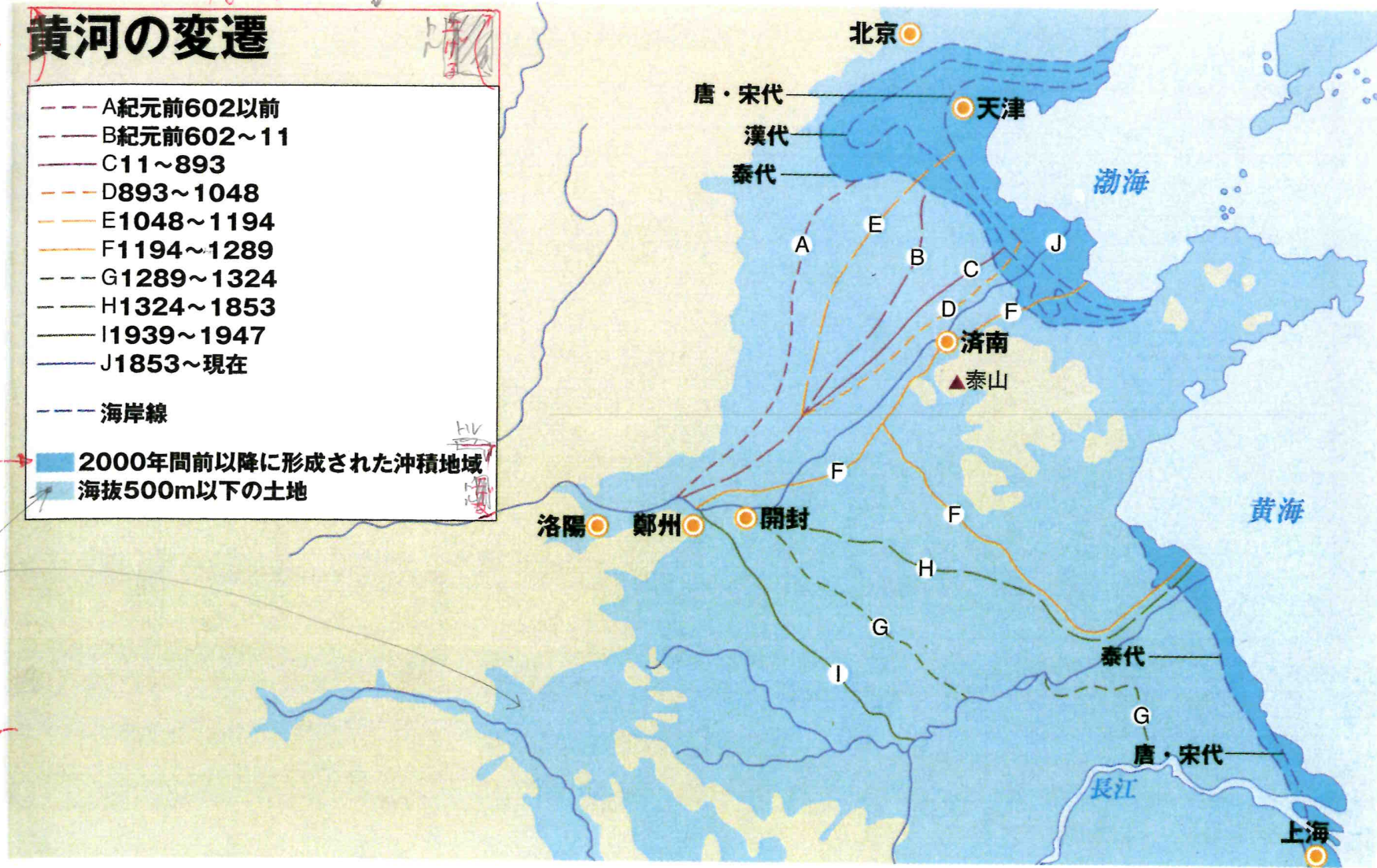
文字は皆ゴ4。右頁の上粉 枠上げ150/262^{P-2/2}

黄河の変遷

- A紀元前602以前
- B紀元前602~11
- C11~893
- D893~1048
- E1048~1194
- F1194~1289
- G1289~1324
- H1324~1853
- I1939~1947
- J1853~現在

--- 海岸線

2000年間前以降に形成された沖積地域
 海拔500m以下の土地



カー
 ・トレスしてF外
 ・文字の間が
 せまくて
 見にくい。
 ・間隔を
 広げて下さい。

第2巻15頁
 第61図の左下
 ・淡い緑(黄緑)
 に変えて下さい。

・黄色に変更
 して下さい。
 (泰山あたりも
 同様。)

済南に
 汚橋
 ①1189
 -2/3

1409

第240図 黄河の変遷

1304

泰山回曲阜と山東省内陸部

飯田辰彦

日経BP企画

2008年8月25日発行

88頁参照

1267
1575
1898
1263
1269

どこからとたか不明

改訂
たまたま

魏国の老若男色の豊かな頬には微笑があり、
聞えてくる言葉のはしはしには明る余韻が
あつた。さすが活気にあふれる超大国
魏国の一面を見る思いであつた。
しかし、馬に乗った武人達の一団が砂ぼ
こりをあげ、あわただしく北田となつて地
へ駆け去つて行くのを見ると、いまもまだ、
戦闘の時であつたのだなあ、と現実の世界に
引き戻されるのだった。(以下「三国志」
吉川英治全集、講談社。他参照)

黄河の流水を翔る船旅は、さらに幾日も幾
日も続いた。
黄河の水を、飽かず見詰めていた。
難升米はその黄河の水を、遙かに見わた
る沿沿と流れゆく広大な黄河。遙かに見わた
す限りの渺渺とした黄河。
話としてではなく、今の目の前に広が
る黄色い流れの雄大な「黄河」。

244
2048

三〇五-I-94P
吉川 10P

「これ」類3行
57.12.14(日)
F 久 1449P 13行
類3行

1264P

「流下り」途絶
「三〇五」
吉川 1-94
前 1100
239
1339年

「こ」れが、中国の歴史を悉に見守りてきた
黄河の流れか。
↑↑↑千三百年以上も昔の、かの太伯の時代
のそのさらに大昔から、
下り行く黄河は、
を、いつときも休む間もなく流氷続けて
い、いつときも
「こ」れと「よ」
倭人達の心のふるさと中国の大地東へ脈々と流れるがける所の黄色い大河を、現に目の前にして、難升米は不思議な感動を覚えるの

「あ」あ
難升米は、己というものの無力を思わぬわ
けにはいかなかった。人間の一瞬は、いかに
も儚い。我が身の命もいずれ

「あ」あ
難升米は、己というものの無力を思わぬわ
けにはいかなかった。人間の一瞬は、いかに
も儚い。我が身の命もいずれ

「こ」れと「よ」

2431P

この頁4行
「尽きず」

「つづける」
「尽きず」

(こと)

元 1490
巻17
前頁3行

元 1861
膝
前頁

元 1260
1,266
P
(詮無)

元 1818
255
P

(こと)

為し遂に
大

「こと」
前頁15行と対

他にも成さなければならぬことがあるよう

に思われ

この水は、広大な華北の、
大平原を、
作り、
培

そして、
中国数千年の歴史と文化とを、
培

ってきた黄河の流れは、
いままた、
新しい魏国の

文化をはぐくみながらも、
――――永遠の

流れの一瞬を、何も知らぬげに流れ下って、
い

くようであつた。

飛び散る水しぶきが、
難升米の膝を濡らし

た。

「だが、その成さなければならぬ事とは

果して何なのであろうか。

私は、そもそも何をせんが為、
魏国の都へ赴こ

うとしてゐるのだろうか。

卑屈にも、臣下の礼をとるだけのために、

私はここまでやってきたのか。

周室の正統な血筋を承け継ぐ我が日、
御子か、

自らへりくだり、
魏帝に朝貢する巡り合わせになつ

たとはいえ、誇りだけは失いたくないものよ

せめて、この貴重な体験を、
何れ倭国の未

来のために役立たせることは出来ないもので
あろうか

(こと)

1386 1038 1905 1344 6月 1.267 怪訝な顔 685
 双眸 二つの目 平伏す 1905 暦の初 6月 1.267 怪訝な顔 685
 改行 改行 改行

血潮は激しく切ないばかりに騒ぐのに、
 難斗米の胸中の思いは定めなく、同
 いところを行きつ戻りつするばかりであつた。
 ところかそんな時、
 誰かが云つたような気がした。振りかえ
 ってみたか、あたりに声をかけたような人の
 気配はない。ただ河を渡り風に、黄色い軍旗がハ
 タハタと翻つていった。
 難斗米のその怪訝な顔に、その瞬間、さ
 とと陽の光がさした。
 頭上、高いところ下、厚い雲の間に燃える
 ような太陽がその姿を現わしたのだった。
 難斗米は、我を忘れて後ずさりした。
 そいつに、跪いて両手をつき、
 頭を垂れ、平伏した。日の光の中に、日御
 子の姿を拝し奉つたように、難斗米には見え
 た。たのたのからであつた。
 ややおぼつて、難斗米は、屹とした目をあげ
 た。その目から、なせともなく熱いものが溢
 みていた。双眸は物狂おしくも、何か、問

え 1426
 え 1778
 え 1251
 え 910

え 2197

1.268^P

コクヨ ケー20 20×20